

あるところに、不世出の天才と謳われた魔術師がいた。

彼の名はステイル＝ギャンビット。

生命の魔術を専攻とし、齢数百歳にしてなお、二十になるかならぬかの青年のように若々しく美しい肉体を持っている。

だが、そんな彼であってもなお、ままならぬことはあるものようだ。

「ふう……」

久し振りに象牙の塔から外出した彼は、ひとつ溜息を吐くと近隣の町で手土産を用意し、呪文をひとつ唱えて、そこからずっと遠方にある小さな村までテレポートで移動した。

そこに住む、ある人物に会うためだ。

その女性の住む家の前まで来ると、彼は期待と不安の入り混じったような表情で、ひとつ咳払いをしてから扉をノックした。

「……はい、少々お待ちください」

家の奥の方から、若い女性の声がした。

ややあって、扉が開かれる。

「どなたですか……？」

そう言いながら扉を開けた女性は、他の村娘たちと同じように質素な衣服に身を包んでいながらも、思わず息を呑むほどに美しかった。

彫像のように均整の取れた、抜群のプロポーション。

肌には染み一つなく、髪は艶やかで、目は大きく、唇はふっくらとして魅惑的だ。

「あ……」

彼女は、そこに立っている人物の姿を見ると、ぱっと顔を綻ばせた。

いや、綻ばせたなどという、生易しいものではない。

「あ……、ああ……！！」

まるで敬虔な信徒が、己の崇拝する神に出会えでもしたかのように歓喜に打ち震え、瞳の端に涙さえ浮かべている。

「あああ、お兄様……、お兄様あっ……！！」

感極まったような声を漏らしながら、女性は彼に駆け寄って抱きついた。

「会いたかった。アンゼリカはずっとずっと、お兄様にまた、お会いしたくて……！」

「もっと早く会いに来なくて、すまなかった」

ステイルも微笑みながら、そんなアンゼリカの体を優しく抱き締める。  
だが、その瞳には、かすかに諦めや失望の入り混じったような、不安そうな色合いがあった。

「中に入れてくれるかい？」

「まあ、どうして私の許可などをお求めになるのですか？」

アンゼリカはそう言うと、すぐにステイルを家の中に引き入れて一番上等な席に座らせ、お茶とありったけの菓子を並べて、下にも置かないもてなしをした。

ステイルの肩を揉み、茶や菓子を口元へ運ぼうとまでする。

まるで貴人に仕える侍従か奴隷でもあるかのような、恭しい奉仕ぶりだった。  
「もう、そんなに私へ気を使わないでもいい。……これは、手土産だよ」

ステイルはどこか苦々しい笑みを浮かべながらそう言って、買って来た菓子折を手渡した。

「ああ、どうしてそんなことをおっしゃるのですか。お兄様のためにご奉仕せず、このアンゼリカめが一体、誰に奉仕するというのでしょうか」

アンゼリカは熱っぽい目でステイルを見つめながら、当たり前のようにそう言った。

手渡された菓子折を、まるで宝物か何かのように、大切そうに胸に抱いている。

「……何を言うのだ」

ステイルは溜め息を吐くと、そっと、アンゼリカの手に自分の手を重ねた。

「お前はもう、この家に嫁いだ身だ。先日、息子も生まれたのだろう。この家に入るのに、よそ者の私が許可を求めるのは当然だし、お前は夫や息子のために奉仕するべきではないか」

諭すようにそう言ったが、アンゼリカの方はそんな彼に対して、困惑したような眼差しを向けるばかりだ。

「お兄様、なにをおっしゃるのですか。そんな事はありません、決して」

ステイルの手に自分の手を重ねてぎゅっと握りながら、そう言って、迷いなく首を横に振った。